京都大学	博士（文学）	氏名	内記 洸
論文題目	親鸞における宗教表現の思索――信が開き出す救済の世界性		

（論文内容の要旨）

浄土真宗の開祖とされる親鸞（1173－1263）は、時代背景や立場の違いに応じて実に様々な仕方で受けとられてきた。だが、その核心にあるのは、「弥陀五劫思惟の願を案ずるに、ひとえに親鸞一人がためなりけり」と表現されるような、極限まで突きつめられた宗教的救済の事柄である。親鸞の浄土の救済思想は、何よりもまず親鸞本人に向けられた、それを語る宗教者当人の救済の表現であって、救済についての研ぎ澄まされた個の自覚から出発するものである。親鸞はそこから「全て」に及ぶ救済を語り、主著『教行信証』等の著述に結晶化する普遍的な救済理念を提示した。そしてそれは、真宗の教学を通して、あるいは歴史学的な手法によって、またあるいは西洋哲学を経由した考察によって、さまざまに論じられてきた。とりわけ思想自体を対象化して客観的に分析することを第一義とする現代の学問状況において、親鸞をめぐる論述はますます精緻になってきている。

しかし、親鸞の普遍的な救済理念が、どこまでも「親鸞一人がため」という救済についての際立った自覚を原点とし、宗教について問い表現することの限界を徹底的に自覚させるものである限りにおいて、親鸞に向き合う現代のわれわれもまた、そのような性質の自覚に関わらないわけにはいかない。とりわけ、全てを対象化する学問のあり方に体現されるような現代世界の状況において、そもそもわれわれはいかにして親鸞の思想に触れうるのか、という地点から思索を始めざるをえない。そしてその地点から、個としてのわれわれを直接巻き込んでいく親鸞思想の具体性と普遍性をとらえ返していかねばならない。

本論文は、以上のような問題関心から、親鸞思想の核心と動態に宗教哲学という仕方で迫ろうとするものである。もちろんそれは、教学や仏教学の伝統的で専門的な教義理解や文献解釈の歴史を踏まえ、それらと対論しながら展開されるものであるが、それだけにとどまるものではない。宗教や宗教についての思索自体にラディカルな転換を迫り、一人一人にその有りようを鋭く問い質してくる親鸞思想は、われわれを「浄土教」や「宗教」をめぐる学問以前の日常的生へと送り返し、「現代のわれわれ」を根本的に翻転させうるものとして受けとり直されるべきものである。そのような狙いの下で、本論文は具体的には以下のような順序で展開される。

第一章「救済における自己」では、本論文全体の導入として、まず親鸞の語る宗教的「自己」のあり方を明らかにし、その位置を確定することが目指される。その中核にあるのは、阿弥陀仏との呼応の「信」という形を取った宗教的決断の主体性であ

り、親鸞の救済思想の全体がそこに掛かっている。ただし、この「信」の自己性は単に個々の実存と等置して済ませられるものではない。親鸞が浮き彫りにするのは、「信」という宗教的要求の発動が自己自身の根本的な無根拠性の暴露と一体の事柄であり、自己を救済へと駆り立てるこの要求は、どこまでも救済へと反転できない自身の根源的迷妄性を突きつけ続けるものだということである。親鸞の言う阿弥陀仏との呼応の「信」とは、自己の歩み全体のこのような否定的・逆説的転換の一点を指し示すものである。そこでは信じる自己の無根拠性と迷妄性が消失するのではなく、迷妄の自己の歩み行きの一切が、真実にたいする方便(仮)として、阿弥陀仏の救済のそのつどの具体的指し示しという仕方で、全体のうちに区別されつつ包まれることになる。強調しなければならないのは、このような形での信を絶対的基点とすることによって、親鸞においては、「往生」という浄土教固有の救済の形式自体が、つねに二重の相の下に現れるということである。この二重性は、具体的には、浄土への「願生」と「得生」、および両者の関係の逆説的な二重化という形をとることになる。

第二章「宗教的基準の転換」では、親鸞の救済世界のこうした二重性の核となる信の根本転換性を、われわれの「善悪」という基準の問題との連関において、とくにそれが『歎異抄』に固有の主題であることを確認しつつ考察していく。『歎異抄』がもつ宗教書としての類稀な魅力は、「善か悪か」というわれわれの通常の価値判断を転倒させ、その基準自体を問いただす逆説的表現の鋭さにあるが、このことは、「阿弥陀仏の本願」という宗教的・超越的基準のそれ自体逆説的な提示に由来する。親鸞の弟子唯円の手によるとされるこの書は、親鸞の言葉を書き留めた前半十条と、親鸞の教えと異なる「異義」を唯円が論駁する後半八条から成るが、後半の異義もこの超越的基準のとらえ損ないとして理解できるのであり、本書の全体を通して、二つの基準の関係性の下で組織される、救済におけるわれわれの具体的な生存のあり方が浮き彫りにされる。一方、以上のように見る時、親鸞の説く救済を善悪の絶対的な基準として固定し、そこから「歎異」として異義批判を展開する『歎異抄』の姿勢自体が、親鸞自身との根本的なずれをはらんだものであることが見えてくる。親鸞本来の教えを確定しようとすることで親鸞自身の姿勢からずれていく『歎異抄』のこうした二面性は、親鸞思想に向きあうわれわれ自身の「基準」を反省的に問い直させ、親鸞思想の「研究」という取り組み自体の困難を見つめ直させるものである。

第三章「浄土の行為論」では、親鸞思想における宗教的行為のあり方へと目を向け、「業」という言葉を手がかりとしてその行為としての具体性に迫ろうとする。言うまでもなく、親鸞思想における宗教的行為は法然から受けとった称名念仏の行へと集約されるが、親鸞はこれを「諸仏による称揚、称讃」として、阿弥陀仏の救済作用に直接関わる超越的事象として受けとり直している。それゆえ、念仏行をめぐって、この超越的行とわれわれの具体的行為との関係が問題にならざるをえない。ここで注

目したいのが親鸞による「業」という語の使用法である。親鸞はこの語を、阿弥陀仏の救済の真実性と個々人の救いなき非真実性とを同時に表現する言葉として用いている。そこでは、成仏に関わる因果という仏教的業の基本的意味に則りつつも、われわれ自身による成仏の可能性が徹底的に否定され、成仏の積極的意味がもっぱら阿弥陀仏自身の成仏の行業に移されることで、業が本来含意していた成仏との因果関係は「信」に譲り渡される。この転換によって、われわれの行業とそれが展開する歴史的世界は、それらの非真実性を照らしつつつねに真実性を告げる矛盾の動性の下で、その全体が「仏の世界」と二重映しに照らし出されることになる。「諸仏による称揚、称讃」としての称名念仏の描出は、この仏の世界自体が、数限りなく存在する「諸仏の浄土」と、それら一切の仏によって証される唯一の「阿弥陀仏の浄土」という二重性の下で規定されることを示している。こうして浄土は、成仏を希求する無数の行業が重畳する場として描かれ、「阿弥陀仏のもとで一切の者が成仏する」という浄土教の普遍的救済のテーゼが体現されることになるのである。

第四章「関係としての浄土」では、この「浄土」という浄土教固有の救済世界について、その世界性・普遍性のあり方が究明される。『教行信証』の構成からも明らかなように、親鸞は浄土を「真－仮」、つまり真実報土と方便化土との対比構造のもとで主題化している。とはいえ、実体的ないし観念的に区別された浄土どうしを比較対照しようというのではない。この対比構造自体が阿弥陀仏のわれわれに対する超越的関係性の表現である。これは、親鸞の関心が他ならぬ浄土成立の「根拠」としての本願へと焦点づけられ、真土と化土が阿弥陀仏の本願の成就とその利他教化への展開に対応していることによる。このように見る時、真土と化土の対比構造は、阿弥陀仏の本願とわれわれの「欲生」（浄土に生まれたいとの意欲）との直接的な関係の表現として受けとられる。「欲生」を基点にしてとらえ返される時、親鸞浄土教の救済世界は、「浄土」と「穢土」をめぐる超越的な二重の関係性として、宗教的転換の前後を矛盾的に内包する一つの救済世界として開き出される。「阿弥陀仏の浄土」という固有の宗教規定は、その内と外とを同時に包んだ一つの普遍的救済を表明するのである。

以上の四つの章による親鸞の宗教思想の解明を受けて、最後の第五章「救済の表現」では、この思想自体の「表現」のあり方について考察を展開する。主体の無根拠性の突きつめと表裏一体の事柄としての「信」を中核に据えるこの救済思想において、その唯一の表現は念仏のみであるはずだが、にもかかわらず親鸞はこの宗教的救済を雄弁に語り、一つの綿密で壮大な体系を展開する。親鸞におけるこの思想表現の意味をどのように理解すればよいのか。この問題に取り組む際に重要な意味を持ってくるのが、「還相の菩薩」というあり方にほかならない。親鸞は、自身にせよ他者にせよ、個々の存在を救済の絶対的な表現者、教化の主体として明示することはない。

浄土への往生以後の展開、穢土に来たる菩薩、あるいは還相回向等についての親鸞の言説が曖昧で謎めいて見えるのはそのためである。このことは、以上に見てきたような二重性と動性を基本とする親鸞的救済においては、阿弥陀仏の救済は一回的な出来事ではなく、還相の菩薩という形での「他者との出会い」へとたえず送り返され、それらの出会いを通して歴史的世界へと展開していくものであることによる。浄土経典における諸仏諸菩薩との出会いの表現や、法然や聖徳太子に関わる親鸞の言説は、信の自己に対する宗教的救済の指し示しは「自－他」の具体的出会いによって主導されることを示している。「還相」としての宗教表現は、宗教的「自－他」関係を基点に無限に展開される、救済そのものの具体的動性を明かすのである。「信が開き出す救済の世界性」はこの動性によって担保されるのであり、現代のわれわれにおける親鸞思想との接点の有りようは、このことの確認の上に追究されねばならないのである。

（論文審査の結果の要旨）

親鸞をめぐっては、教学の伝統に根差した解釈に加えて、実証的な歴史学的研究、「近代仏教」の流れに棹差した思想的・思想史的研究、あるいは京都学派に代表される西洋哲学のリソースを活用した哲学的研究など、これまでさまざまな種類の研究が積み重ねられてきた。そして、これらの種々の研究動向はそれぞれの立場において精緻化され、多大な学術的成果を蓄積してきた。その成果はきわめて豊富かつ多様であり、もはや一人の人間がその全体を一望することができないほどである。しかし、こうした形での研究の進展が、必ずしも親鸞の宗教思想の核心をよりよく照らし出すとは限らない。「弥陀五劫思惟の願を案ずるに、ひとえに親鸞一人がためなりけり」と表現されるように、救済の普遍性と自己の救済不可能性の逆説を自覚的に突きつめた親鸞の宗教思想には、それに触れる者に対して、その独自な「宗教表現」の場に自ら身を置き、そこに働く思索を自ら自身の思索を通して受けとり直すことを迫るものがある。本論文は、そのような意味での親鸞の「宗教哲学的」研究に正面から取り組んだものである。

もちろん親鸞をめぐる種々の研究を無視するわけではない。論者はそれらを丹念に辿り、内容豊かな脚注へと組みこんでいる。その上で本文では、親鸞の救済世界がそのままではもはや意味をもちえなくなった「現代の世界」に身を置き、彼我の隔たりを突き破って思索を突き動かしてくるいくつかの中心主題を軸にして、親鸞的世界を再構成していく。このような本論文の姿勢は、京都学派における浄土仏教の宗教哲学の流れを代表する武内義範の「親鸞と現代」というモチーフを自覚的に継承するものである。だが、武内のように西洋哲学の概念や同時代のキリスト教神学を動員して親鸞解釈を形成することはあえてせず、『教行信証』を中心とした親鸞の複層的で錯綜した言説世界に分け入り、それを追思索することに徹底する。それによって浮かび上がるのは、「浄土教を「阿弥陀仏」という固有の絶対者による超越的な救済思想と取る」ような固定化した見方の下では抑えこまれてしまう、「二重性」と「動性」を重畳させていく親鸞の思索の表現世界のあり方である。本論文の独自な貢献は、この点を首尾一貫した仕方で描き出したことにある。

第一章では、親鸞思想全体の起点となる「阿弥陀仏との呼応の信」について、この信の主体においては、信という宗教的要求の発動が自己自身の根底的な無根拠性の暴露と一体の事柄であり、自己を救済へと駆り立てる要求が、どこまでも救済へと反転できない自身の根源的迷妄性を突きつけ続けるものであることが示される。この洞察を軸として、親鸞においては「往生」という浄土教固有の救済様式自体がつねに逆説的な二重性の下にあり、これがその救済世界の基本性格であることが見定められる。

この逆説的二重性が、第二章では『歎異抄』で鋭く問い出される善悪の「基準」の問題との連関において、また第三章では「業」を手がかりとした宗教的行為論として掘り下げられていく。第二章では、江戸期の妙音院了祥の『歎異抄聞記』における「二種の異義」の区分を参照しつつ、通常の善悪の基準を転倒させるかに見える親鸞

の表現自体が「阿弥陀仏の本願」という超越的基準の逆説的提示となることが解き明かされる。この視点から、親鸞の教えを絶対的な基準として「異義」を論駁する『歎異抄』後半の唯円の姿勢自体に親鸞自身とのズレを見てとる考察は秀逸である。第三章では、仏教の基本語である「業」が、親鸞においては阿弥陀仏の救済の真実性と個々人の救いなき非真実性を同時に表現する語として用いられていることに注意が向けられる。そしてそこから、われわれの行業の展開する歴史的世界が、その非真実性を照らし出しつつ真実性を告げる「仏の世界」との二重映しの中で矛盾的動性において捉えられている様子が浮き彫りにされる。この一連の考察は、親鸞の浄土仏教の独自な展開と仏教的伝統自体との関係のあり方を説得的に示しえている。

以上の論を受けて、第四章では親鸞の浄土論が「関係としての浄土」として特徴づけられる。『教行信証』の構成からも明らかなように、親鸞は浄土を「真‐仮」、すなわち真実報土と方便化土との対比構造の下で主題化している。この区別が浄土成立の根拠としての「本願」からいかにして導出されているかを辿り直すことで、この対比構造自体が阿弥陀仏のわれわれに対する超越的関係性の表現であることが示される。それは「浄土」の外に「穢土」を排除するものではなく、浄土と穢土の逆説的関係を告げて「内」と「外」を同時に包むことで、一つの普遍的救済の表明となりうるのである。最後に第五章では、この浄土論の二重性と動性が、それを言語化する親鸞の救済思想の「表現」のあり方をめぐる考察へと延長される。そこでは、聖徳太子や法然という親鸞にとっての「還相の菩薩」となる存在を導きとすることで、二重性と動性を基本とする親鸞的救済においては、阿弥陀仏の救済は一回的な出来事ではなく、還相の菩薩という形での「他者との出会い」にたえず送り返され、それを通して歴史的世界へと展開していくものであることが示される。ダイナミックで一貫した親鸞思想の姿を描く本論文にふさわしい締めくくりであるといえよう。

このように真摯な思索に貫かれた本論文であるが、問題点がないわけではない。その真摯さの裏返しとして、論者の濃密な思索は、時として閉鎖的で解きほぐし難い思弁へと振れてしまうことがある。また、歴史的世界を強調するのであれば、武内義範にならって、親鸞思想と歴史性の問題との関係の要となる正像末史観を取り扱うべきであったが、この問題についてはごく断片的な言及しかできていない。とはいえ、こうした問題点は論者自身が十分自覚している所であり、今後の研鑽によって克服されていくだろうと期待できる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。２０２１年１月８日、調査委員３名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。